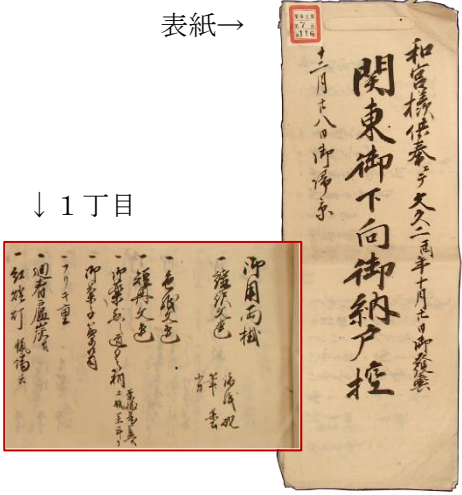


明治維新前夜―皇女和宮

専修大学図書館に所蔵されている菊亭文庫の中に、皇女和宮に縁の「和宮様わのみやさま」供奉くぶがニテ文久ぶんきゅう二酉年十月廿日御發興はつかおんはつこう関東御下向御納戸控かんとうおんげこうおなんどのひかえ（第7箱116）という資料があります。形態は横長で6丁（紙縫り綴じ）の冊子で、表紙に「十二月廿八日御帰京」と記されています。『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』の分類体系で言えば、この資料の大分類は「記録」で、小分類は「道中記」です。外題には「和宮様にお供し文久2年10月20日関東下向に立、〔江戸城本丸大奥の〕御納戸〔に納めるお道具の〕控」とあります。和宮一行は文久元年（1861）10月20日に京都桂御所を出立し中仙道を江戸へと向かい、11月15日に江戸城内の清水屋敷に入り、12月11日和宮は江戸城本丸大奥に入りま



和宮は、仁孝天皇の第八皇女で、異母兄の孝明天皇より和宮の名を賜り、天皇の命により有栖川宮熾仁親王と婚約しました。幕末期、大老井伊直弼のもとでなされた日米修好通称条約の無断調印を機に、尊皇攘夷運動は天皇を尊崇する思想（尊皇）と自国を中華ちゅうかとし他国を夷荻いでぎとして排撃する思想（攘夷）が結合し、一つの概念として政治運動へと転化し激化していきました。公武運動の進展もあり、幕府は公武一和に役立つ理由で和宮の降嫁を奏請しました。和宮はいったん辞退するも幕府は年内の降嫁を要請し、孝明天皇の説得を受けて和宮は明春の下向を承諾しました。文久元年（1861）4月19日、和宮は内親王宣下を受け、諱を親子と賜り、文久2年（1862）2月11日、和宮と徳川家茂の婚礼が行われました。

本学は、藤原氏北家閑院流、西園寺家の世系、五摂家に次ぐ家柄で、家業として琵琶の演奏を担っていた今出川家（菊亭家）に伝えられた文書・典籍3,418点からなる「菊亭文庫」を所蔵しています。文庫の内容については、冊子体目録『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』を（参照下さい）。なお、『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』は、平成30年2月15日より専修大学学術機関リポジトリ「SI-Box」でも公開されています。

明治関連情報！

今年は明治元年から起算して 150 年の節目の年！ 「明治の歩みをつなぐ、つたえる」と題して全国津々浦々のさまざまな取り組みを紹介しています。イベントもたくさん行われているので、是非見に行ってみてください！

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/index.html>

[参考 URL]

- 国際日本文化研究センター（ちりめん本データベース）
<http://shinku.nichibun.ac.jp/chirimen/>
- 国立国会図書館リサーチナビ
https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/posit-495.php
- 印刷博物館 HP「コレクション探訪 『島活字』」
http://www.printing-museum.org/collection/looking/04_03.html
- 国立国会図書館 HP「錦絵でたのしむ江戸の名所コラム：明治の錦絵」
<http://www.ndl.go.jp/landmarks/column/5.html>
- 太田記念美術館 HP「コレクション19 大蘇芳年芳流閣両雄動」
<http://www.ukiyoe-ota-muse.jp/collection/list19>
- 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション「デジタルで読む福澤諭吉 世界国畫、一」
<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a13/34>

[参考図書]

参考図書は図書館に所蔵している本ばかりです。是非 OPAC で検索してみてください。

- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』三弥井書店, 2004
- 惣郷正明『図説日本の洋学』築地書館, 1970
- 惣郷正明『洋学の系譜：江戸から明治へ』研究社出版, 1984
- 沼田次郎『洋学』（日本歴史叢書 40）吉川弘文館, 1989
- 専修大学編集『専修大学 120 年：1880・2000』専修大学出版局, 1999
- 専修大学図書館編『和うるわし：日本の文字と書物の歴史：専修大学図書館特別展』専修大学図書館, 2011
- 『静寛院宮御日記』1-2（続日本史籍協会叢書）東京大学出版会, 1976
- 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館, 1979.3-1997.4
- 福澤諭吉著、マリオン・ソシエ、西川俊作編『西洋事情』慶應義塾大学出版会, 2009.6
- 千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞―東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』国書刊行会, 2008.1
- 木村八重子『草双紙の世界――江戸の出版文化』ペリかん社, 2009.7

編集後記

『ぶんこ』第2号を発行しました。この時代に象徴される「明治維新」や「文明開化」という言葉は知っていても、書物のイメージはあまりないのではないのでしょうか。今回の特集は図書館らしく「書物」にスポットを当てました。少しでも知っていただき、興味を持っていただければ幸いです。

奥付：
専修大学図書館
平成 30 年 4 月 16 日発行
題字：荒川依知

※今回特集した貴重書は請求記号を掲載しています。原則として頭に“A”がつきます。（ちりめん本は貴重書ではありませんが、特別書庫に配架しています）
※貴重書のご利用については、「ぶんこ」創刊号をご覧ください。
<https://www.senshu-u.ac.jp/news/20171031-12.html>



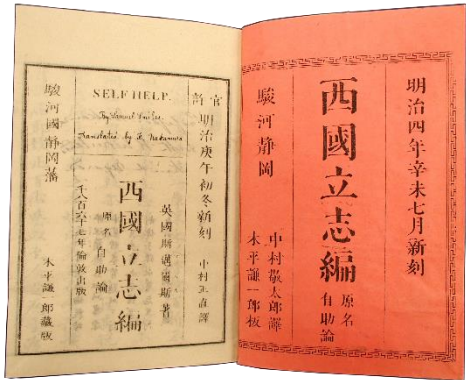
第2号 目次

- P1・・・特集！ 書物から見る明治
- P2-3・・・明治の文化・学問
Pick up! ちりめん本
- P4・・・明治維新前夜―皇女和宮
明治関連情報

特集！ 書物から見る明治

今から一五〇年前の一八六八年、元号が慶應から明治へと改まりました。ご存知の通り、この年の前後に起こった一連の改革は明治維新と呼ばれています。ここを画期として、政治や経済、文化の様々な側面が変わっていき、日本は近代国家への道を歩み始めました。書物もまた、西洋の知識や技術と出会い、今までとは違った新しいものが次々と生み出されていきました。

今回の「ぶんこ」では、「書物から見る明治」と題して、専修大学図書館所蔵の貴重書から明治の文化をのぞいてみましょう。



ス邁爾斯(Smiles)著；中村敬太郎譯『ス邁爾斯(スマイルス)自助論，一名，西國立志編』（明治 4[1871]）
A/159/Sm4/1～11

題字の背景について

明治時代の浮世絵は、その鮮やかな赤色から「赤絵」と呼ばれた。これは、江戸時代末期になって輸入されたアニリンという安くて発色の良い人工顔料によるもの。

図は、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』の一場面。芳流閣という建物の屋根の上で、犬塚信乃と犬飼現八の2人の八犬士がにらみ合う。横ではなく縦に2枚続けた大胆な構図で描かれている。

月岡芳年画『芳流閣両雄動』[明治 18(1885)]

←中面につづく

【おしらせ】向井家浮世絵コレクション収蔵しました。

この度、専修大学図書館では向井家浮世絵コレクションを収蔵しました。これは故向井信夫氏が収集していた江戸後期く明治初期の浮世絵コレクションで、既に収められている江戸期和本のコレクションと対をなすものです。内容は、芝居や戯作に関するものや、月岡芳年の作品など。

※今号に掲載されている浮世絵は、全て向井家浮世絵コレクションのものです。

明治の文化・学問

書物に描かれた明治の文化と、書物そのものが表す明治という時代。

新たな学問や文化と出会ったとき、人々はそれをどのように紙に記していったのか。現代に遺されたその跡をたどってみましょう。



学問の文明開化

江戸時代、学問といえば漢学中国の学問、特に儒学が中心でした。基本的に外国との交流は厳しく制限され、西洋の学問（洋学）も例外ではありませんでした。しかし幕末に外国船が多く来航し、欧米諸国との接触が深まると、外交や国防軍事等の見地から、洋学の必要にせまられるようになりました。このような中で、安政3年（1858）に幕府が洋学の研究教育の中心機関として初めて「蕃書調所」（その後「洋書調所」→「開成所」→「開成学校」と改称、東京大学の前身の一つとなった）が設置されました。

慶應4年（1868）、維新政府の基本方針として「五ヶ条の御誓文」が発表され、その第五条には「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」とあります。ここに政府として欧米の近代文化と学問を導入し、教育の近代化を進める方針が明示されたのです。

洋学を学ぶために

洋学を学ぶために必要不可欠であるのが語学でした。幕末から明治初期には英語のテキストや辞書が多く出版されました。上述の開成所からも日本最初の本格的英和辞書『英和对訳袖珍辞書』（文久2年〔1862〕初版刊）、単語集『英吉利単語篇』（スペリング・発音法の教科書『英語階梯』、リーダーの教科書『英語訓蒙』（いずれも慶應2年〔1866〕初版刊）等のテキストが相次いで出版されました。また、J.C.ヘボン編纂により日本最初の和英辞書『和英語林集成』（慶應2年初版刊）も刊行され、ここに英和と和英両方の辞書がそろったこととなりました。

専修大学図書館では、これらのうち、『英語階梯』と『和英語林集成』を所蔵しています。（左の写真参照）

洋学の導入と専修大学

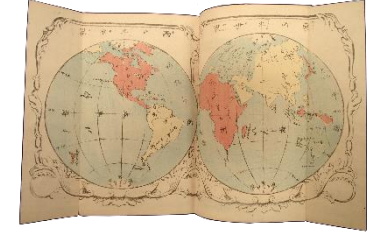
欧米文化と学問を学ぶために、多くの留学生が海外に派遣されました。専修大学の創立者4人も同じ時期にアメリカへ留学し、留学先で出会いました。帰国後の明治13年（1880）、専修大学の前身である専修学校が創立されました。専修学校は日本初の経済専門学校であり、私立法律専門学校でした。また、当時法律を教える高等教育機関では、英語・仏語で教授されていました。この資料は、英国の法理学者オースチンの著作に基づいて鳩山和夫が専修学校で講義した内容を、田島達策が記述し、出版されたもので、このほかにも講義筆記が出版されました。

【左】オースチン原著；鳩山和夫講義；田島達策筆記編輯『法理』明治16[1883] A/321/A96

【右】相馬永胤著『日本現行訴訟法要領』明治16[1883] A/327/So36

世界地理の概要を、子ども向けに七五調で書いた地誌書。福澤の著作のうち、最も人口に膾炙した。写真は、折り込みで付された多色刷りの地図。

福澤諭吉『世界國盡』明治4[1871]（明治2[1869]刊の再刻） A/290/F85/1~6



小学校の教科書としても使用された世界地誌。地図や人々の風俗などの図版を載せているのが特徴。

内田正雄『興地誌略』明治4[1871] A/290/U14/1~3



①An English spelling-book with reading lessons, for the beginners at the school Kaiseidzio in Yedo（『英語階梯』）慶應2[1866] A/831/Ka21
【左】表紙【右】標題紙



②A Japanese and English dictionary, with an English and Japanese index / by J.C. Hepburn（J.C.ヘボン編訳『和英語林集成』）慶應3[1867] A/833/H52
【上】標題紙【下】「學問」の項

・①『英語階梯』は和装本ながら標題紙は洋書の形式、②『和英語林集成』は洋装本ながら標題紙は和本の形式をとっている。両者とも和洋折衷である点などがユニークである。

江戸時代は同時代の事件を描くことが禁止されていたが、明治になってそれが解禁された。錦絵新聞は明治7年（1874年）から明治14年（1881年）にかけてのごく短期間に発行された、ゴシップ色の強い大衆向け新聞。

月岡芳年画『郵便報知新聞』532号 [明治8(1875)]



西洋各国の政治経済や歴史等について著されたもの。書物から得た知識だけでなく、福澤が洋行していたときに得た見聞も記されている。

福澤諭吉『西洋事情』慶應3[1867] A/302.3/F85



ちりめん本

明治中期から昭和初期にかけて出版された小型の和綴本です。クレープ状に細かく皺を寄せたちりめん状の和紙を使用していることから「ちりめん本」と呼ばれています。

鮮やかな多色刷り木版画の挿絵入りで、日本の昔話などを外国語に翻訳したちりめん本は、初期は日本人の英語教育を目的とし、後には渡来した外国人向けのお土産として作られました。また外国にも販売店を置き、輸出もしました。発案者で出版者でもある長谷川武次郎の作品は、作りも大変丁寧で、ちりめん本を出していた出版者としてとくに有名です。

専修大学図書館では、このたびの中から20冊のちりめん本を収蔵しました。全て出版者として長谷川武次郎の名前が記されています。『桃太郎』『舌切雀』『猿蟹合戦』など、美しい装丁でどこかで聞いたお話が、手のひらにのびるサイズにまとめられています。

4月から本館第1開架閲覧室で展示もしています。是非ご覧ください。

「ちりめん本」の作り方

「ちりめん本」の発行者長谷川は、和紙は「伊予砥紙」（伊予国〔現在の愛媛県〕で作られた上質な和紙）を使用しました。

まず、絵師、刷師によって絵が刷り上げられ、次に訳者による欧文を活字にして文章を配分し、再び刷ります。そして次に、絵や文字を刷った和紙を軽く湿らせ、円筒状のものに巻き、それを上から押して縮めます。縮めた紙を一旦開いて、次にそれと直角の方向にまた筒に巻き、押し縮めます。さらに広げ今度は斜めに筒に巻き押し縮め、それを少なくとも8回、多い時は10数回も繰り返します。こうしてやっとしぼの細かいクレープ状の紙ができます。縮めた紙は、原紙のほぼ70〜80%になり、しつとりしたちりめん本ならの風合いがでます。

長谷川武次郎という人

武次郎は、嘉永6年（1853年）に西宮与惣兵衛の5人兄弟の3番目、次男として日本橋で生まれます。16歳になると築地のミッシェンスクールに通い英語を習い始めます。彼の英語力は著しく進歩し、小遣い稼ぎに外国人に東京案内が出来るほどの接触やその後さらに広がる来日外国人との交友が、武次郎にとって「ちりめん本」というたぐい稀な本を誕生させる契機になったといえます。

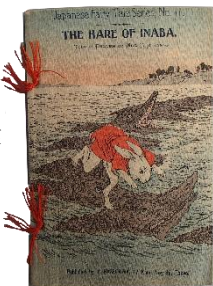
The Tongue-cut sparrow 『舌切雀』

鮮齋永濯画 昭和4[1929] 16版（初版は明治18年） /388/J24/2



Battle of the monkey and the crab 『猿蟹合戦』

ダビド、タムソン訳述 (David Thompson) 昭和4[1929] 16版（初版は明治18年） /388/J24/3



The hare of Inaba 『因幡の白兔』

ジェームス夫人訳述 (Mrs. T.H. James) 鮮齋永濯画 明治19[1885] /388/J24/11

